アインシャムス大学
外国語学部
日本語学科

日本語とアラビア語の伝達モダリティの対照研究
終助詞を中心に

ヌールハーン．タハイルナディ

指導教師

ワリード・イブラヒム

カイロ大学文学部日本語日本文学科教条

ナイム．トロバ

アインシャムス大学外国語学部アラビア語学科助教条

2018 年

目　次

序　章

序　章 6
0：はじめに 6
0-1: 本研究の目的 6
0-2: モダリティの概観 6
0-3: 研究の重要性 6
0-4:研究のデータ 7
0-5: 研究方法 7
0-6：本研究の主題と論点 7
0-7：本論文の構成 8
第 1 章 9
日本語の伝達モダリティと終助詞 9
１－日本語の文の構成 10
２－日本語のモダリティ 11
3-日本語のモダリテイの体系 15
４－モダリティのカテゴリー 15
4-1)　取り立てのモダリティ 16
4-2)　みとめ方のモダリティ 17
4-3)　テンスのモダリティ 17
4-4)　説明のモダリティ 17
4-5)　価値判断のモダリティ 18
4-6)　真偽判断のモダリティ 19
4-7) 表現類型のモダリティ 19
4-8)　丁寧さのモダリティ 20
4-9)　表現・伝達態度のモダリティのタイプ 20
5) 日本語の伝達態度のモダリティ 20
5-1）働き掛け 21
5.1.1　伝達態度のモダリティの働き掛けの命令 21
5.1.2　伝達態度のモダリティの働き掛けの依頼 23

5.1.3　伝達態度のモダリティの働き掛けの禁止 24
5-2）伝達態度のモダリティの疑問・問い掛け・確認 25
5-3）伝達態度のモダリティの表出 27
5-4）伝達態度のモダリティの強調 28
5-5）伝達態度のモダリティの述べ立て 28
６－終助詞（文末詞） 30
6-1) 終助詞「よ」の意味と用法 30
6-1-1)情報の伝え 30
6-1-2) 命令、禁止、希求を伝え「よ」 31
6-2) 終助詞「ね」の意味と用法 34
6-3) 終助詞「か」の意味と用法 37
6.3.1)「か」問いかけ文 37
6.3.2)「か」働きかけ文 38
6.3.3)「か」述べ立て文 39
6.3.4)「か」疑い文 40
6.3.5)「か」詠嘆文 41
6.3.6)知識や情報を持っていない文 41
第 2 章 46
アラビア語の「’uslwb ‘insha’y」と要求表現 46
１－はじめに 47
2- 「’uslwb khabary」（叙述的な内容） 48
3- 「’uslwb ‘insha’y」（陳述的な内容） 4949
4- 非要求表現の文 49
4-1 称賛と非難　المدح والذم 49
4-2 宣誓様式 القسم 50
4-3 契約法 ألفاظ العقود 50
5- 陳述的な内容様式要求表現文 50
5-1 命令様式 50
5-1-1 命令様式が表す修辞的な意味 51
5-1-1-1 許可 الإباحة 51
5-1-1-2　選択 التخيير 52
5-1-1-3 脅迫　التهديد 52

5-1-1-4 不可能 التعجيز 52
5-1-1-5 侮辱と恥辱 الإهانة والتحقير 53
5-1-1-6 妥協 التسوية 53
5-1-1-7 希望 التمنى 53
5-1-1-8 祈願 الدعاء 54
5-1-1-9 請願 إلتماس 54
5-1-1-10 助言と導き النصح والإرشاد 54
5-1-1-11 名誉 الإكرام 55
5-1-1-12 状況の説明 تصوير الحال 55
5-1-1-13 興奮や刺激 الإثارة والتهييج 56
5-1-1-14 行動の**訓誡** الحث على اتصاف بصفة 56
5-1-1-15 願い الرجاء 56
5-2 禁止様式 النهى 56
5-2-1 禁止様式が表す修辞的な意味 57
5-2-1-1 祈願 الدعاء 57
5-2-1-2 請願 الإلتماس 57
5-2-1-3 助言と導き النصح والإرشاد 57
5-2-1-4 行動の**訓誡** الحث على الفعل 58
5-2-1-5 希望 التمنى 58
5-2-1-6 侮辱と恥辱 الإهانة والتحقير 58
5-2-1-7 叱**責** التوبيخ 59
5-2-1-8 脅迫 التهديد 59
5-2-1-9 絶**望** التيئيس 59
5-2-1-10 脚色 التهويل 60
5-2-1-11 行為の絶対的禁止 النهى مطلقا عن فعل 60
5-2-1-12 警告 التحذير 60
5-3 祈願様式 الدعاء 61
5-4 申し出様式 العرض 61
5-5 強い申し出様式 التحضيض 61
5-6 希望様式 التمنى 62
5-7 期待様式 الرجاء 62
5-8 呼びかけ様式 النداء 63

5-8-1 呼びかけ様式が表す修辞的な意味 63
5-8-1-1 誘惑 الإغراء 63
5-8-1-2 分化 الإختصاص 64
5-8-1-3 嘆願 الاستغاثة 64
5-8-1-4 瘢痕 الندبة 64
5-8-1-5 黙殺 الزجر 65
5-8-1-6 通知 التنبيه 65
5-8-1-7 心痛と悲哀 التحسر والتحزن 65
5-8-1-8 感嘆 التعجب 66
5-8-1-9 皮肉 السخرية 66
5-9 疑問様式 الاستفهام 67
5-9-1 疑問詞 67
5-9-1-1 「ハムザ（الهمزة）」 67
5-9-1-2 「ハル (هل)」 68
5-9-1-3「誰（من）」 70
5-9-1-4 「何 (ما) （ماذا）」 70
5-9-1-5 「いつ (متى)」 71
5-9-1-6 「أَيَّان」 71
5-9-1-7 「كيف」 71
5-9-1-8 「どこ (أين)」 72
5-9-1-9「أَنَّى」 72
5-9-1-10「どのくらい (كم)」 72
5-9-1-11「どちら (أَي)」 73
5-9-1-12「（どうして）（なぜ）(لماذا)・(لما)」 73
５-9-2 疑問様式が表す修辞的な意味 73
5-9-2-1 遅さ الاستبطاء 73
5-9-2-2 遠さ الاستبعاد 74
5-9-2-3 心痛 التحسر 74
5-9-2-4 感嘆 التعجب 75
5-9-2-5 脚色 التهويل 75
5-9-2-6 脅迫 التهديد 75
5-9-2-7 行動の訓誡 الحث على الفعل 76

5-9-2-8 決定　التقرير 76
5-9-2-9 不定　الإنكار 76
5-10　感嘆様式　التعجب 77
6－おわりに： 78
第 3 章 80
日本語とアラビア語におけるモダリテイの対照 80
1-はじめに 81
2-伝達態度のモダリティの終助詞「よ」を含む例文の分析 81
2-1　情報を伝える「よ」 82
2−2　命令、禁止、希求を伝える「よ」 84
2−3　祈願を伝える「よ」 88
2−４　呼びかけを伝える「よ」 89
2−5　疑問の関係文に含む「よ」 90
3-伝達態度のモダリティの終助詞「ね」を含む例文の分析 92
3-1 理由を伝え「ね 92
3-2 禁止を伝える「ね」 94
4-伝達態度のモダリティの終助詞「か」を含む例文の分析 94
4-1 遠さを伝える「か」 94
4-2 誘いかけを伝える「か」 95
4-3 不定を伝える「か」 95
4-4 感嘆様式を伝える「か」 96
4-5 勧めを伝える「か」 96
4-6 依頼を伝える「か」 97
4-7 同意要求の述べ立てを伝える「か」 97
結論 102
資料 106
参考文献 107
-المصادر 109
ثالثا: المراجع الإنجليزية 109

序　章

0：はじめに

0-1: 本研究の目的

アラビア語母語話者が日本語を学習する際に、モダリティを表す形式、特に終助詞の機能や日本語のモダリティに対応するアラビア語がわかりにくいことが様々な困難を生み出している。そこで本研究では、アラビア語母語話者の日本語学習者と日本語母語話者のアラビア語学習者のために、日本語におけるモダリティの意識、分類、使い方、種類などと、アラビア語におけるモダリティと同じ機能「’uslwb ‘insha’y（陳述的な内容）」を様々な例で比較対照し、日本語の終助詞がアラビア語におけるどんな表現にあるか明らかにすることを目的とする。

0-2: モダリティの概観

現代日本語においては動詞にボイス、アスペクト、テンス、モダリティをあらわす形式が続き、さらに終助詞などが加わって述語を構成することができる。そのうち動詞に接続するボイス、アスペクト、テンスはおおむね客観的な事態を反映するといえるのに対して、モダリティはそれについての断定や推量のように話者の主観的な態度を表すものである。

それに対して、アラビア語では、文は、内容の面からは二つの種類に分かれている。一つは、「’uslwb khabary（叙述的な内容）」であり、もう一つは、真偽を問わない「’uslwb ‘insha’y（陳述的な内容）」である。さらに、「’uslwb ‘insha’y」は二種類に分かれる。その一つは、相手に何らかの呼応を求める表現で「talaby（以下、「要求表現」と呼ぶ）」で、もう一つは「ghayr talaby（以下、「非要求表現」と呼ぶ）」である。

本研究では日本語の伝達モダリティ、特に、「終助詞」と、それらに対応すると考えられるアラビア語の「’uslwb ‘insha’y」、特に「要求表現」を比較対照する。その上で、文によって述べられる内容と話し手の現実との関係性について、つまり、日本語とアラビア語の文における、客観的内容を表す「命題」と対置される「話し手の主観的把握」（話し手の発話時における心的態度）の関係を対照することを研究目的とする。

0-3: 研究の重要性

本研究では現代日本語におけるモダリティとアラビア語における「’uslwb ‘insha’y」を比較対照する。つまり日本語の文とアラビア語の文において客観的内容を表す「命題」と対置される「話し手の主観的把握」（話し手の発話時における心的態度）を研究したいと思う。現代日本語におけるモダリティ

に関する研究は数多く行われてきた。一方、それらの表現が、アラビア語においてはどのように表されるかということを研究した者はほとんどいない。従って、日本語のモダリティはアラビア語母語話者の日本語学習者にとって明らかではない。また、アラビア語母語話者の日本語学習者と日本語語母語話者のアラビア語学習者が日本語からアラビア語に翻訳するとき、モダリティと時に終助詞の機能をよくわかりない。それで、アラビア語における同じ機能の表現がわからない。モダリティ表現について、アラビア語と日本語間の翻訳がしにくいという状況がある。そのため、本研究では、両言語の文の意味に対する日本語のモダリティと「’uslwb ‘insha’y」の役割を明らかにし、具体的に意味、種類、使い方、分類などを説明したい。特に日本語の終助詞とアラビア語の「’uslwb ‘insha’y」の「要求表現」がどのようなことを表わすかを研究したいと思う。

0-4:研究のデータ

本研究では、ワリード・イブラヒムの『父』、『母』とナギーブ．マハフーズの『蜃気楼』、ハキームの『オリエントからの小鳥』を出典として用いる。また、日本語とアラビア語でモダリティや終助詞や「’uslwb ‘insha’y」について書かれた研究を参考にして取り扱う。

0-5: 研究方法

本研究では、日本語とアラビア語のモダリティを比較対照するために、日本語とアラビア語の先行研究において研究されたモダリティや終助詞や「’uslwb ‘insha’y」に関する情報を整理し、ナギーブ・マハフーズの『蜃気楼』、ハキームの『オリエントからの小鳥』、ワリード・イブラヒムの『父』、『母』とその翻訳されたものから終助詞と「’uslwb ‘insha’y」を含む文を抽出し、終助詞と「’uslwb ‘insha’y」の表現、種類、意味論、使い方などを対照して、論じる。

0-6：本研究の主題と論点

上記の資料におけるモダリティ、終助詞はその意味、定義、種類、分類、使い方などが単純ではなく、外国人学習者にとっては非常に分かりにくいのではないだろうか。また反対に、アラビア語の「’uslwb ‘insha’y」も、日本人と外国人学習者には、その意味 、定義、種類、分類、使い方などが分かりにくいのではないだろうか。そうであれば、、モダリティと「’uslwb ‘insha’y」の間の類似点と相違点を把握するのは難しいに違いない。日本語の終助詞における疑問形、呼格形、要望形、依頼形はアラビア語ではどうなっているだろうか。類似点と相違点はどのようにわかるだろうかなどを論点としたい。

0-7：本論文の構成

本論文の構成は、次のとおりである。まず第 1 章では資料に含まれる日本語のモダリティの定義、分類、範囲を取り上げる。また、伝達態度のモダリティと終助詞を研究する。次に、第 2 章ではアラビア語の「’uslwb ‘insha’y」の定義、分類、範囲を取り上げる。また、アラビア語における「’uslwb ‘insha’y」の「要求表現」の表現と意味論と用法などを研究する。そして、第３章では日本語の伝達態度のモダリティと終助詞とアラビア語の「’uslwb ‘insha’y」の「要求表現」を比較対照する。

第 1 章

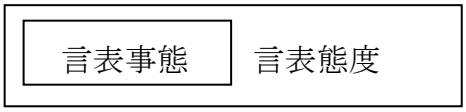
日本語の伝達モダリティと終助詞

１ー日本語の文の構成

文、特に意味内容からは質的に大きく異なった二つの層から成り立っている。一つは「叙述の素材」という言表事態である。そしてもう一つは「文の述べ方」という言表態度である。言表事態とは話し手が文の意味内容のうち、客体的な出来事や事柄を表した部分である。そして、言表事態はヴォイスやアスペクトやみとめ方やテンスなどによって形成されている。一方、言表態度とは話し手の命題に対する態度を陳述するものである。言表態度を形成するのがモダリティである。

次の図１のようになる。[1]

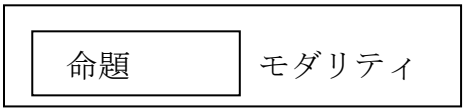
図１



また、文は大きく分けて、客観的な事柄内容である命題と話し手の発話時点での心的態度（命題に対する捉まえ方や伝達態度）であるモダリティからなり、モダリティが命題を包み込むような形で階層構造化されている。従って、モダリティとは主観的な判断と表現態度を表すことである。

次の図２のようになる。

図２



命題とモダリティの関係が詳しくわかるように、次の文を考察すれば、理解されよう。

兄の眼はどうやらそれへ執着しているらしい。 (矢田, 2002:105)

この文では（兄の眼はそれへ執着）が命題を表す。客観的な事柄を表す部分であるから。また、（どうやら、しているらしい）がモダリティを表す。この文では主観的な判断．表現態度を表す部分である。

以上のように、日本語の文は、作用領域の異なる文法カテゴリーが集まり、一つの層状の構造を形成していることが分かる。例えば、

陰鬱な顔しか君の頭には残っていないかしら。 (豊島, 1966:16)

[1]仁田義雄『日本語のモダリティと人称』P17

「陰鬱な顔しか君の頭には残っ＋てい＋なかっ＋た＋かしら」からも分かるように、[[[[[ヴォイス]アスベクト]肯否]テンス]モダリティ]のような層状構造をとって、日本語の文は成り立っている。**(**岩波**, 2000: viii)**

２－日本語のモダリティ

言語によって、人々は様々なコミュニケーションをしているが、その際、わからないことについてのものを尋ねたり、依頼をしたり、質問したりというように、様々な述べ方で文を作っている。その述べ方をモダリテイというのである。モダリティとは話している内容に対する話し手の判断や感じ方を表す言語表現のことである。 **(**岩波**, 2000: 3)**

以下のように、様々な文の述べ方を「ヌールが歩く」という事態をもとにして具体的に考えていく。

（1）ヌールさんが歩く。

以上の例では命題「主語＋述語」「ヌールさん＋歩く」で構成されている。話し手の発話時における心的態度はないので、モダリティの表現は付け加えられていない。

（2）ヌールさんが歩かなければならない。

（1）と（2）の例を比較すると、「ヌールさん＋歩く」ということは同じことでも、それに対する必要性を確認するという要素が付け加えられている。ここでは、命題「ヌールさん＋歩く」にモダリティ「なければならない」の表現を付け加えている。

（3）ヌールさんが歩くに違いない。　（推量）

以上の例では、命題にヌールさんという主語が歩くことについて推量する「に違いない」というモダリティを付け加えている。

（4）ヌールさんが歩くか。　（疑問）

以上の例では、命題にヌールさんという主語が歩くことについて疑問視するため、「か」というモダリティを付け加えている。

（5）ヌールさんが歩かなければならないに違いない。（必要と推量）

以上の例では、命題にヌールさんが歩くことについての必要性を表す「なければならない」と推量を表す「に違いない」というモダリティを付け加えている。

（6）ヌールさんが歩かなければならないか。　（必要と疑問）

以上の例では、命題にヌールさんが歩くことについて必要性を表す「なければならない」と疑問を表す「か」というモダリティを付け加えている。

（7）ヌールさん、歩いてください。　（命令、依頼）

以上の例では、命題にヌールさんが歩くことについて依頼するため「ください」というモダリティを付け加えている。

（８）ヌールさん、歩きましょう。　　（意志、勧誘）

以上の例では、命題にヌールさんを歩くことに勧誘するため「しょう」というモダリティを付け加えている。

このように、様々な形式がついたり、つかなかったりすることで、命令、疑問、推量、依頼、勧誘といった意味を表す文になっている。また、これらが一緒に使われた文もある。

一定の内容について述べる文を構成するには、その内容となる事態に対して、文としての様々な「述べ方」、すなわち発話の様式（Mode）を選択しなければならない。言い換えれば、話し手が独立した言語行為（日本語やアラビア語など）をするなら、その事態に対する話し手の把握の仕方は必ず表示されなければならないのである。

そこで、文は二つの要素にわけることができる。一つは述べる内容として文の中核を構成する事態（言表事態）である。これは「コト」あるいは命題（proposition）とも呼ばれる。もう一つは、「述べ方」「発話の様式」を表す部分である。これはモダリティ（modality,ムード mode）と呼ばれる。

このモダリティは聞き手に対する述べかけ方と、現実に対するとらえ方からできている。話し手による事柄の現実への関係づけである。

また、日本語のモダリティの表現には一般的に４つの形式がある。以下に説明し、「話す、言う、する、伝える、行く」という動詞を用い、例を提示する。

１）述語の活用形、各種の述語付加形式。

話し手が聞き手に何か頼む・依頼する・命令するなどの際、述語あるいは動詞に様々な表現を付け加わえている。

- 述語・接辞・複合動詞の活用形式。
  複合動詞とは二つ以上の単語から成る複合語であり、動詞にモダリティを付け加えている。

（話せ、話そう、話しましょう、話してください、話さなさい、話してくれ。）

研究対象とする小説でも以下の表現が用いられている。

わけをお話しなさい。　　(渡辺, 1970:61)

以上のような文では話し手が聞き手に話すことを依頼するために、述語に「なさい」というモダリティを付け加えている。

- 接辞（相当表現）、複合動詞
  （言います、言いたい、言わなければならない、言ってはいけない、言ってもいい、言えばいい、言いそうだ）

小説では以下の通りである。

たわけた事を言ってはいけない。 (太宰, 1989:4)

以上のような文では話し手が聞き手にたわけた事を言うことを禁止するために、述語に「てはいけない」というモダリティを付け加えている。

- 助動詞（相当表現）

助動詞とは動詞と同じような形態を持つが、他の動詞と結びついて相当などの文法機能を表す語である。

（するはずだ、するべきだ、するのだ、するわけだ、するそうだ、するようだ、するだろう、するらしい、するかもしれない、するにちがいない）

小説では以下の通りである。

今お姉様とても読む気がしないかもしれない。 (宮本, 1981:88)

以上のような文では、話し手が聞き手に読むことができるかどうかよくわからないと言いたいために、述語に「かもしれない」というモダリティを付け加えている。

- 遂行動詞表現

遂行動詞とは発言した時点でその動作を行ったことになる動詞である。

（たぶん伝えると思う、伝えることを命ずる、伝えるよう命ずる）

小説では以下の通りである。

私は或る意味で娘冥加だし女房冥加だと云えると思っているのよ。

(宮本, 1981:88)

以上のような文では話し手が聞き手に、或る意味で娘冥加だし女房冥加だと云えると考えることを言いたいために、述語に「思っている」というモダリティを付け加えている。

- 終助詞（相当表現）

終助詞とは文末にある助詞である。後ほど詳しく説明する。

（行くな、行くよ、行くね、行くよね、行くか、行くじゃないか）

小説では以下の通りである。

僕が取りに行くのか？ (太宰, 1989:5)

以上のような文では話し手が聞き手に、取りに行くことを疑問視したいがために、述語に「か」というモダリティを付け加えている。

２）文副詞（文副詞相当表現）

副詞は文を修飾する語であるが、述語に付け加えるのではなく、動詞の前に入れている。

たぶん飲む、おそらく飲む、どうも飲むようだ、どうやら飲むようだ、もしかしたら飲むかもしれない、ひょっとすると飲むかもしれない、いったい飲むだろうか、はたして飲むだろうか

小説では以下の通りである。

もしかしたらそれは自分の呼吸の激しさかもしれない。

(矢田, 2002:105)

以上のような文では話し手が聞き手に、呼吸の激しさを感じるかどうかよくわからないので、「かもしれない」というモダリティを述語に付け加えている上に、モダリティの一部の「もしかしたら」という副詞も動詞の前に入れている。

３）感動詞（間投詞）．間投助詞

➢ 感動詞

感動詞とは感動や応答．呼び掛けを表す語である。

はい、いいえ、えーと、あのう、うーん、はあ、え？あれ？

小説では以下の通りである。

蒲団の裾へまわって湯たんぽの加減をみていた紀久子は「え？」と聞きかえした。 (矢田, 2002:99)

上の文では話し手が聞き手に、よく聞こえなかったので、呼び掛けするために、「え」というモダリティで表している。

➢ 間投助詞

私はね、今回の結果をね、たいへんうれしく。[2]

４）イントネーション

断定の時（飲み。）質問の時（飲む↑？）

５）ムードのタ

➢ 発見のタ

あ、あった。[3]

➢ 思い出しのタ

確かヌールさんでしたっけ。

[2] モダリティ．井上．優 http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/09_modarityi.pdf

[3] モダリティ．井上．優 http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/09_modarityi.pdf